目次

まえがき　3

第1章　ある環境活動家の変貌……15

グリーンピースの創始者が〝転向〟　16

米上院エネルギー・天然資源委員会での証言／環境に配慮したエネルギー選択／活動資金の八割は財団から／身勝手な一神教の論理／放射性物質輸送の情報源／グリーンピースは〝正義の騎士〟か／著名な環境活動家はどう考えているか

米国の政策転換が波紋を呼ぶ　30

原子力発電の復活／一般教書演説でも強調／温暖化研究に熱心な米国／北極海の変化はフロリダにも影響／一〇〇〇人の科学者に調査依頼

COPとはいったい何だったのか　37

米国と欧州が対立／「京都議定書は効果なし」／温暖化防止のカギ／ライフスタイルの見直し

第2章　石油文明の終わりと地球温暖化……47

資源大国だったこれまでの日本　48

豊富な資源が支えた江戸の暮らし／今の日本の自給率は四パーセント／新規油田の発見は低下の一途

「ピーク・オイル論」を重要視する欧米　53

ロシアのガス資源量にも限界／輸入依存の日本では危機感なし／蓄積がなくなれば石油危機に

激増する発展途上国の石油消費量　58
アジア途上国の消費量は三倍増に／米国の「第三次オイル・ショック」／石油不足で価格はさらに上昇か
人口爆発が環境破壊に拍車をかける　64
家族が増えると燃料を多く消費／貧困や非効率な農業技術も原因
水の循環を壊すとどうなるか　68
温暖化は豪雨と旱魃を招く／赤道近くで地球がエアコン活動／砂漠の地下水は氷河期の遺産
都市化で水分蒸発のない砂漠になった　74
東京の気温はこの一世紀で二度上昇／人工熱を発生させない生活に戻れるか／都心気候には仙人も住めない
繁栄の要因が滅びのモトになった　79
海岸やサンゴ礁が浸食の被害に／先進国の日常生活が難民を作る／気温調整のメカニズムが狂う心配も／シュメール文明が滅びた理由
エコ産業革命とエゴの相克　88
環境問題が新しい国際主義を生んだ／緑の党も理屈通りには行動できない
第3章　資源小国・日本のおかれた立場……93
エネルギーの国際競争時代が加速　94
東シナ海の油田では中国が先行／国境線上での紛争は避けられない／ウクライナへの供給停止の影響／ロシアへのエネルギー依存は危険／湾岸戦争の裏で展開された外

交戦争／石油獲得に必要不可欠な外交手腕

資源エネルギーか技術エネルギーか　104
自然エネルギーも地域に偏りがある／リサイクルで半永久的エネルギーに

原子力平和利用の五〇年に学ぶ　107
将来の需要増に備え政府が決断／事故続きで原子力への不信感高まる／不安感や反対運動が根強く残る

燃料サイクルを阻むものはだれか　112
プルトニウムは今の発電炉でも燃焼中／燃料サイクルの国内完結が悲願／プルサーマル計画に怪文書出まわる／反プルトニウム派とメジャーの思惑／核不拡散派はコスト高で攻勢かける／米国政府に大きな変化の兆し

日本でも燃料サイクルがついにスタート　125
インドの核実験がきっかけで方針変更／プルトニウム阻止のロビイスト団体が活動／再処理方針が「大綱」で確定／米国も日本の核不拡散対策を絶賛／次のステップは高速増殖炉の再開

第4章　過密社会化する世界のゆくえ……135

日本の立場を理解してもらうのは難しい　136
外国世論は「日本に核武装の可能性あり」／東アジアの政治情勢にも不安材料

新エネルギーは当てになるのか　140
自然エネルギーも日本は不足／気まぐれな発電には期待できない／風が吹くと電力会社の赤字が増える／バックアップ電源が必要なら二重投資

大量消費スタイルの見直しは容易ではない 149

テレビ視聴を一時間減らすのは困難／環境保全意識では世界の下位レベル／環境より経済が大事な日本人／世界人口は年間六〇〇〇万人ずつ増加

過密社会の論理が世界を覆う 156

調和優先、減点主義の社会／能ある人は我慢、能なき人には下駄／米国や国連にも過密社会の波／日本は米国方式を選ぶしかない

過密社会が育てた日本の知恵と文化 162

集団意識が日本を支えてきた／二〇〇〇年前から過密社会／過密化する世界は協調型に向かう／イランの主張は通用しない

日本特有の多神教が世界協調に貢献する 170

神道で拝むご神体は多種多様／異国の食文化を取り入れ豊かになった／哲学や宗教さえ素直に受け入れた日本人

日本の伝統文化こそ環境保全のモデル 175

戦前は完璧なリサイクル社会／茶の湯と生け花は社交の手段として発達した／結果より過程を大切にする日本文化／住宅技術にも環境対応の工夫が多い／天下人の城を築いた石積みの技術／適材適所は過密社会日本の知恵

あとがき 187